

子どもと美術館

安曇野ちひろ美術館における地域活動・学校との提携活動

執筆者：竹迫 祐子

掲載誌：長野の子ども白書 平成 23 年度版

子どもの幸せと平和を願いつづけた絵本画家いわさきちひろ。その死後 3 年目に世界初の絵本の専門美術館として開館した“いわさきちひろ絵本美術館(現、ちひろ美術館・東京)”。安曇野はその 20 周年を記念して 1997 年に開館しました。現在、世界 35 カ国 201 人の画家の作品 26,500 点を所蔵し、5 つの展示室ごとに年に 4 回展示を開催しています。

安曇野ちひろ美術館がある長野県北安曇郡松川村は、高校生まで医療費無料の村。人口一万余人。村内には保育園 2 園、小・中学校が各 1 校。一学年あたり 100 人近い子どもがいます。1997 年の開館に先立ち、当館では村内の各戸に、村を通じて年間フリーパス券を配布するとともに、小・中学校に赴き、学校、クラスで、また、児童、生徒個人で美術館を楽しんでほしいことを話し、村の子どもは受付で名乗れば自由に入館できるようにしました。(2007 年からは、高校生以下全て無料)

■安曇野ちひろ美術館の活動

2001 年に増築を行い、多目的ホールを設け、2002 年以降、地域、学校との提携活動が一層活発化しました。現在、当館では来館した保育園、幼稚園、小・中学校の子どもたちを対象に行うギャラリートークや絵本の読み聞かせをはじめ、以下のような活動を行っています。

○中学生ボランティアによるワークショップ

○安曇野アートライン・サマースクール

○出前授業

(県内の小・中学校に出かけて行うちひろや絵本に関するレクチャー、読みきかせ、ちひろの水彩技法体験等の活動)

○スクールミュージアム

○絵本との出会い活動

(村内のあかちゃんに絵本をプレゼント。村の保健センター等でお母さんたちに絵本のレファレンス等の活動)

○海外ゲストとの交流活動

(海外から美術館を訪れる絵本画家や絵本関係者との交流)

■中学生ボランティアの取り組み

さまざまな活動の中でも、安曇野ちひろ美術館の最も特徴的な活動は、中学生ボランティアの活動でしょう。

安曇野ちひろ美術館が開館した 1997 年当時、美術館は「冬の時代」と呼ばれ、全国的に来館者減が著しくなってきた時代。その一方で、それを打開する

ためにも、子どもを対象にした活動が注目されはじめた時代でもあり、同時に、多くの美術館でボランティアの導入が盛んになってきた時代でもありました。

当館でも、ボランティアの導入が話題に上りましたが、ちひろ縁の地とは言え、我々ちひろ美術館は外から来た存在。いきなり、おとなのボランティアを募っても、どのように活動を展開していくか、容易いことではないと思えました。それなら、20年後30年後の成人ボランティアを目指して、子どもたちに活躍してもらえたら。そんな長期的な展望で取り組みはじめたのが中学生ボランティアです。

また、その頃、多くの中学校で、校内が荒れ、授業もままならない状況も伝えられていました。学校が荒れる、つまり、子どもたちが荒れるといわれる原因には、さまざまなものがあるでしょうが、今日のように、家族の規模も小さくなり、氾濫する情報の量とは裏腹に子どもの生活範囲も、家庭と学校に限定され縮こまりがちなか中、生きる上での価値観も限定されやすく、思考の幅が狭くなってきているという現実もその一因でしょう。ひとつの価値観しか受け入れられない、特定の空気に馴染めない子どもには、確かに息が詰まるような状況が想像されます。そうしたことを考えるにつけ、「美術館という場が異なる価値観の集積場所だ」という思いを強くしていました。人間は多面的な存在です。その評価も一面的なものではありません。異なる側面では、異なる評価が生まれます。美術館は、そうした異なる価値観に互いに気づききっかけを作ることができるのではないか、と。

中学生に、美術館と関わり、活動を支えてもらえたら。こう考えて、2002年に中学校に提案、動く立体作品を制作する島添昭義さんの企画展で、展示の補助や実演、解説をしてもらいました。登録した生徒70人、延べボランティア数200人。来館者を前にしての実演や作品解説は、誰もが上手くできるわけではありません。この年、ピカールの解説ぶりでお客様を楽しませた子は、「卒業したら、吉本に入りたい。」と夢を語ってくれたのを覚えています。

日々の活動を通じて、互いに学校では見られない面を、美術館ではじめて知る、そんなことが起こってきました。先生方も心配で様子を見に来られましたが、子どもたちの姿にほっとしたり、意外な面を発見して驚いたり。何より、村外や県外からの来館者に「ここの中学生はみんないい子ね。本当に嬉しかった。ありがとう。」と言われることも度々あり、褒められると、一層精力的に活動に取り組み、あっという間に予定の4週間が過ぎました。

この活動は以後毎年つづき、2011年で10年目。

因みに、2011年は「水彩技法体験」「美術館探検ツアーガイド」「絵本の読み聞かせ」の3つの活動を、以下のように進めました。

○6月16日 募集説明会@松川中学校

○7月5日 接遇研修会@松川中学校

プロのマナー講師による接遇研修。言葉づかいや笑顔、身だしなみを学ぶ。

○7月11・12日 実技研修@松川中学校

○7月23日～8月17日 ボランティア活動

中学生156名が登録し、日々の当番も自分たちで管理しながら、7000名を越す来館者に対応してくれました。

■中学生ボランティア活動がもたらすもの

活動中、毎日綴られる日記には、「お客様の質問に、最初はうまく答えられなかったけど、何回も受けていたらてきぱき応えられるようになってきました。館内アナウンスも声が震えてしまったけど、挑戦できてよかったです。積極的に取り組みました。」(2年女子)「今日は最後のボランティアでした。ちょっとさびしい感じですが、でも悔いの残らないように全力でがんばりたいです。」(3年生女子)「ぼくはこのボランティアに参加して、よかったなーと思いました。お客さまとたくさんお話できるし、一番うれしいのはお客様が楽しんで笑顔でいてくれることです。ぼくはそれを見ると元気になります。」(2年生男子)といった言葉が綴られています。活動に参加した来館者からは、「技法について教えていただき、目からウロコ。ちひろさんの絵の見方を深めていただきました。中学生の皆さんがとても感じよく、楽しく体験できました。ありがとうございます」といった感想が寄せられます。

接遇は、マニュアルどおりには行きません。活動は同じでも、相手が全て異なるからです。同じことを尋ねられるのでも、聞かれ方が違います。その都度、子どもたちは学んだことから、最良の対応を導き出そうと必死です。上手くいくこともあれば、いかないこともある。その繰り返しの中で、夏休みの始めに比べ、終わる頃には確実に表情が変化しているのがわかります。校長先生の一人は、「この活動を通して、失敗することを経験して欲しい」と語られました。一夏、悲喜こもごもの体験をして、確実に子どもたちは育っていきます。

これまでに関わってくれた子どもは優に千人を超えます。その中には、教育者をめざして、大学院生になり、夏休みには後輩の指導に当たってくれている子もいれば、大学卒業後、司書教諭となって今や図書ボランティアの活動の柱になってくれている子もいます。

■子どもの育ちに美術館は何ができるか？

こうした活動は、参加した子どもたちに変化＝成長をもたらすとともに、来館者の変化、私たち美術館スタッフの変化、館の空気の変化を生みます。さらには、ボランティアの子どもたちを通して、その家族や地域の、美術館への理解と共感を生み、美術館を支えてくださる力に繋がり、地域を変えてきています。

それは、村、教育委員会、地域社会との相互信頼と協力なくしては、実現できません。私たち安曇野ちひろ美術館は、その意味からも大層幸せな美術館だと感謝するとともに、この信頼と協力が、ちひろ美術館が「子どもの幸せと平和」という人類の普遍的な願いに立っているからこそにほかならないからだ実感します。

美術館の活動、文化の活動のスペンは長く、50年先、100年先を見据えての種蒔く仕事です。それを継承してくれるのは、他でもない、私たちが今一緒に活動している子どもたち自身であると確信しています。